ひとりぼっちの幽霊

音無　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひとりぼっちの幽霊

【Ｎコード】
Ｎ０８４０Ｔ

【作者名】
音無　無音

【あらすじ】
台所の角にちょこんと座っている不思議な霊。　日に日に恐怖がまして行って・・・・・

台所のはじにいる、小さな子。
母に相談すると母は優しく「あなたにも見えるようになったのね」と言う。
「時期に見えなくなるわ」
と微笑んでいたが日に日に恐怖はましていった。

ある日。
角を見るとその子は血を流していた。
「大丈夫？」と恐る恐る問うとすぅっと消えてしまった。
もうこれで関係はおしまいだと思った。

夜中。寒くて起きてしまいそのまま眠れずにいた。
どこかで聞いた「ホットミルク」を飲んで寝ようと思う。
例の台所に来た。
角には。
「・・・・・・ブ」
喋ってる？
「ダイ・・・・・・ジョウ・・・・・・・・ブ？」
悪寒がした。　立ってもいられなくなった。
だけど、立ち尽くしてはいけない。
そのまま私は部屋に戻り布団をかぶり寝た。
きっと、幻聴。幻想。幻。

次の日、台所には何もなかった。

母に伝えると
「それは、あなたの恐怖があの子の力になってるのね」
要するに怖がらなければいいのよ、と言っていた。
そんなの無理だよ。
「それならおばあちゃんに相談してみなさい」
母がそう言っていたので、相談してみることにした。

「そうかあ、見たのかあ。そんじゃあなぁ、
怖くなくなる事を教えてあげようかねえ」
「怖くなくなる方法？」

夜――
「おやすみ」
私はみんなにそう言って部屋に戻ろうとした。
・・・・・、今日は台所を通ってから寝よう。

いつもの場所にいつものあの子がいた。
そして私はこういった。

「いつも見守ってくれて“ありがとう”」

その子は目を丸くしてこちらを向いた。
「気付いてあげれなくて、ごめんね」
すると、その子は光を帯び、段々と薄くなっていく。
「君は、怖くないよ」
ありがとう、優しい幽霊。

おばあちゃんが言うには、あの子がこの家に住んでいたとき。
母親にも父親にも誰からも見捨てられ、寂しく一人で生きてきた霊らしい。
誰にも気付かれず。
“同じ境遇だった”私を心から心配し、見守っててくれたんだろう。
（半分仇（あだ）となったけど）

今は何もない台所。
癖でどうしても角を眺めてしまう。
居なくなるとちょっとさみしいかな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0840t/

ひとりぼっちの幽霊

2011年10月3日11時20分発行